

歪な生命体

小林大輝

齒車の欠けた歪な生命体が

ぼんやり歩いている

油のないブリキの腕を振りつつ

もう何年も動作を続けている

齒車の欠けた歪な生命体は

さみしい浜辺を静かに歩いている

浜辺は今日もおだやかで

だけでもどこかなしい白浜で

昔の文明の残骸のみが堆積している

古ぼけて反射を忘れたレンズには

昔見た一枚の写真のみ投影される

なんとなく幸せそうな顔の写真

なんとか思い出そうとするのだけでも

写真の顔がドロリと解けて猫になる

ネズミになる

犬にも見えるし

赤子にも見える

古ぼけたレンズに

顔は映らない

覚えられない

なぜだかとてもかなしい気持ちが

空虚な胸をたたく

歪な生命体は

また浜辺を歩き続ける

星月は変わらずに運行し

浜辺はなおも青く穏やかである

歪な生命体は歩き続ける

ふと目をやれば今はもうそろそろ

夜明けに向かって空が白んでいる

生命体は静かに歩き続ける